

「障害者の生涯学習」が目指す 共に学び、生きる共生社会とは

青森県コンファレンス
2025年11月10日



神戸大学で実施している
知的障害者に大学教育を開く
「学ぶ楽しみ発見プログラム」
火曜日のつだっちの授業で、
受講生である知的障害のある男性が
神戸大学の一般学生と一緒に
作詞・作曲して歌った作品です。

この制作者がどんな人か
想像してみましよう。

「学ぶ楽しみ発見プログラム」

since 2019

大学の授業としてつくった、非障害学生と知的障害学生が共に学ぶ場

- 2019年度から開始したプログラムで愛称はKUPI (Kobe University Program for Inclusion)。

- 火・水・金、17時～20時の授業を中心に構成。

- 知的障害者に大学教育を開くモデル開発事業
- 文部科学省の委託研究



KUPIの火曜日の授業

- 神戸大学3年生の授業「社会教育課題研究」との合同授業です。
- 大学の学びっぽいテーマを決めて、ゆっくり討議をした上で、共同作品を制作します。

2019年度 ライフストーリーを語り合う

2020年度 自己表現Ⅰ

2021年度 自己表現Ⅱ

2022年度 作詞作曲してMVを創る

2023年度 SDGS

2024年度 いのちをつなぐ

2025年度 共生とは何か



こんなやりとりが楽しいKUPI

- 「いのちをつなぐ」2024年度の授業で、「遺伝子」の話を深めたとき、あるKUPI学生が、「あたしのおなかに、赤ちゃんができる。この赤ちゃんもあたし」といった意味の発言を繰り返しました。
- 生殖のしくみを理解しないと、「遺伝子」の理解が深まらなないと考えた神戸大学の学生たちは、「あなたから生まれる赤ちゃんは、あなたではない」ことを一生懸命説明しようとしてしました。
- しかし、どう説明しても、手応えを感じられずに悩んだ学生たちは、ふりかえりの時間に、相談をして意見を述べあいました。
- その結果、このKUPI学生の認識を正そうとするよりも、彼女の人間観に興味をもって、彼女から私たちが楽しみながら学ぶことを考えよう、ということになりました。



もう1本、2021年度に制作されたMVをご覧ください

このKUPI学生は、私たちの学内に設置された交流スペース（カフェ「アゴラ」）で働いています。

大学で働いている人たちで、KUPI学生として大学の授業を受けている障害者は、他にもいます。

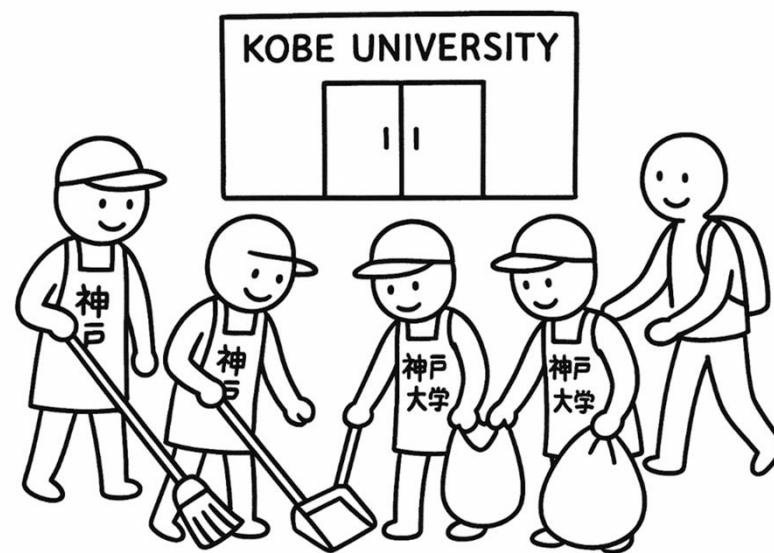
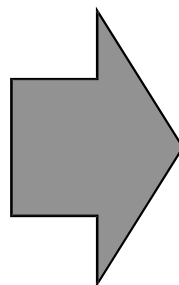
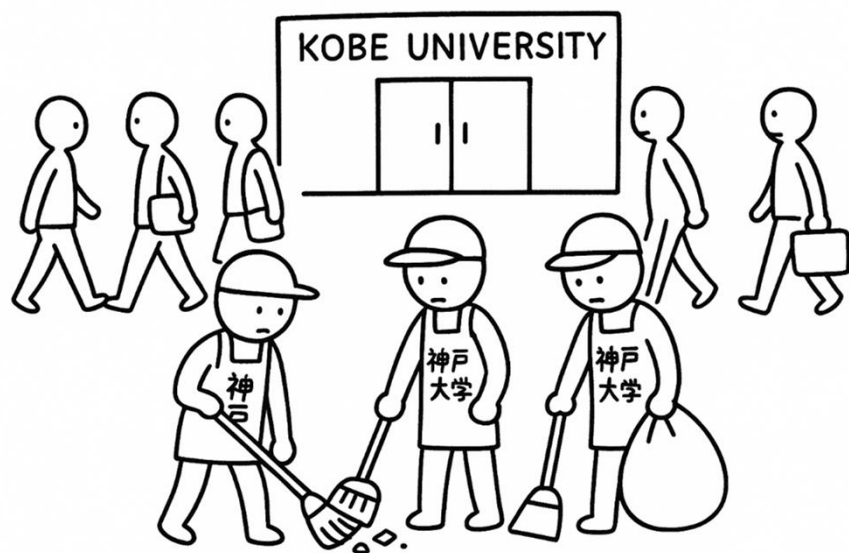
日中はキャンパスの清掃業務などで汗を流し、夕方になると授業に出席したり、学生たちとおしゃべりを楽しんだりする人たちもいます。

そうした日常の中で、大学で働いてくれている障害者に対する学生たちのまなざしも変わってきます。

神戸大学で雇用されて清掃活動に従事している知的障害者たちが、「なるべく学生や教職員に迷惑をかけないように」と、気を遣いながら作業をしている一方で、大勢の学生や教職員は、その知的障害者たちに対して無関心な様子。

神戸大学で雇用されて清掃活動に従事している知的障害者たちが、学生や教職員の中に混ざって楽しく仕事をしている様子。

と、ChatGPTにお願いしたら、こんなイラストを描いてくれました。



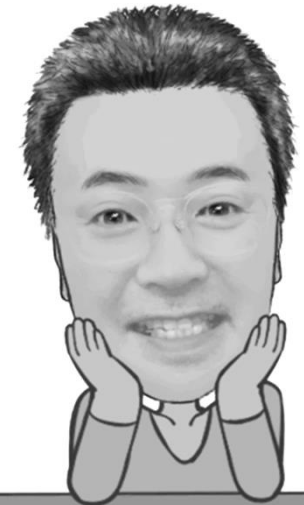
すべての人が自分のもてる力を発揮して貢献
する社会は、「共に生きるための学び」の上
に成り立ちます

ところで、

「共に生きる学び」って何でしょう

UNESCOの生涯学習政策の文脈で、
「共に生きるための学び」
が重視されてきました

そもそも、
なぜ生涯学習なの？



ユネスコによる生涯教育の提唱

1960年代 （ラングランによる生涯教育理念の提唱）

「世の中の変化が激しいから、人間は学び続けないとまずいよね。だから生涯教育が必要です。」

1970年代以降 （ジェルピ『生涯教育』東京創元社、1973年）

「世の中に問題が多すぎる。みんなで学んで一緒に問題を解決しよう。そのために生涯教育が必要です！」

※ ラングランもジェルピも、ユネスコの成人教育課長として活躍した人

共に生きるための学び

- 変化の激しい社会の中で、他者と理解しあうこと、他者との平和的な関係が、とっても必要とされていますね。
- でも、いま世界では、他者との良好な関係がとても欠けていますね。
- だから、ユネスコは、「共に生きるための学び」を強調するんです。
- 「共に生きるための学び」によって、私たちは、他者への理解を深め、お互いに助けあいながら、みんなで大きな課題を解決していくための、新しい精神を創造しなければなりません。

ユネスコ「ドロール報告」（1996年）

「共に生きるための学び」とは

- 「共に生きるための学び」は、「共に生きる」ことができていない現状を変えていく学びです。
- 「共に生きる」ことなくしては、私たちが経験するさまざまな危機を乗り越えることができません。
- 「共に生きるための学び」は、すべての人が持つ力を持ち寄って、未来社会を創造していく、そのための学びです。



障害者の生涯学習推進政策も、
ユネスコの生涯学習政策の流れをくんでいます

障害者権利条約

2006年 国連総会採択
2014年 日本政府批准

第二四条 締約国は、教育についての障害者の権利を認める。
締約国は、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、障害者を包容するあらゆる段階の教育制度及び生涯学習を確保する。

「包容する」は、「インクルーシヴ」という英語の翻訳です。
「インクルーシヴ」は、「エクスクルーシヴ」（排除）の反意語です。
したがってこの部分は、
「生涯学習における排除をなくしていきましょう」
という意味になりますね。

国内法も同じ方向を向いています。2006年に改正された教育基本法で、生涯学習についての次の項目が加わりました。

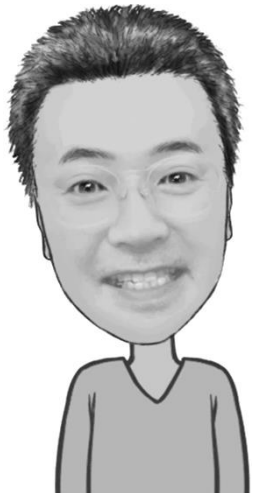
教育基本法

第三条 国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

では、
私たちはどうやって
共に生きるための学びを
創っていったらよいのでしょうか

地道にやるしかねーべっちゃ

※つだっちは仙台育ちです



障害者の生涯学習推進の論点

- | | |
|---|---------|
| • ちょっとした調整や変更で、障害者の学びの場になる社会資源はないか。 | 合理的配慮 |
| • 社会教育施設等が、「実際に障害者はあまり来ないから、ニーズがないのだろう」と思い込んでいるところはないか。 | 提供者側の認識 |
| • 障害者や障害者の家族が、「うまく受け入れてもらえないだろう」と思い込んで、学びの場に参加しないということはないか。 | 学習者側の認識 |
| • 実際に障害者が学ぶことのできる場の情報が、十分に流通しているか。 | 情報 |
| • 障害者の学びの場を新しくつくることはできないか。 | 場づくり |

お薦めの取り組み案

- 地域で活用できる施設や組織を探してつながる
- 地域ごとに、いろいろな団体の代表が集まって、困っていること、無理なくできることを出しあう
- 情報を集めて発信する
- 出会った人を大切にして、その人と対話を重ねるところからはじめる

兵庫県の場合

- 兵庫県では、兵庫県教育委員会と神戸大学が事務局となって、障害者の生涯学習推進政策を進めています。
- 地域ごとに障害者の生涯学習の場をつくっていくためには、それぞれの地域に学びの拠点が必要だと考えました。
- 兵庫県の場合、博物館を拠点にできないかと考えました。

そこで……



「障がい者が博物館等公共的な学習資源を効果的に活用するためのモデル開発」

プロジェクト(愛称:ミュージアムインクルージョンプロジェクト)へのご協力をお願い

2021年度、県下の知的障害者を対象に生涯学習についてのアンケートを実施したところ、余暇時間が多いにも関わらず、博物館等を利用した学びの機会にすることが少ないことがわかりました。博物館などは障害を持つ人にとって縁遠い場所と感じられているようです。そこで、2022年度は……

障害のある人にとって、博物館などが身近なものとして足を運び、楽しく学ぶことのできる場になるためにはどうしたらいいかな?ということを障害者と博物館が共に考え、取組んでいこうとしています。その取組みにご協力いただけますよう、お願いします。

～博物館インクルージョンプロジェクト～



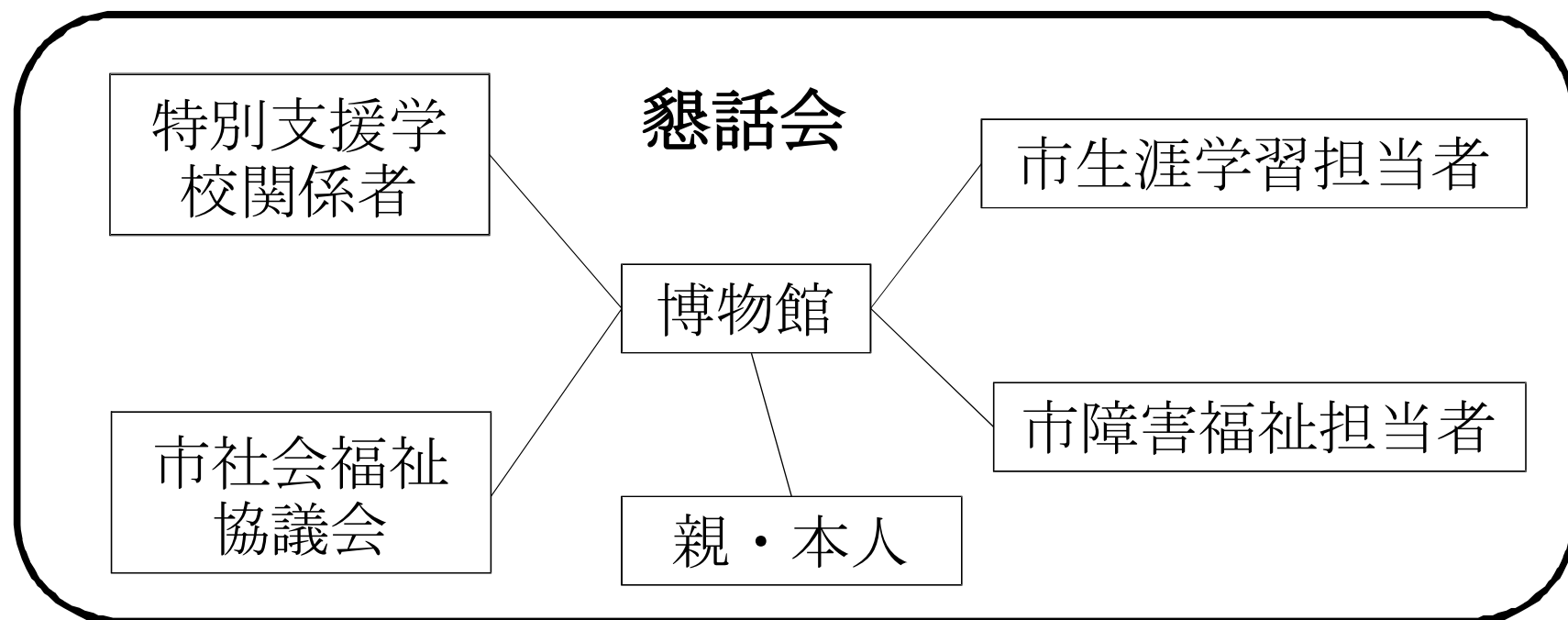
兵庫県コンソーシアム2023年度のプロジェクト

ミュージアム・インクルージョン・プロジェクト

- ・ 博物館などの公共的な学びの場にロックオン！
- ・ 障害者の調査隊を結成して送り込む！
- ・ 学びを深める資料展示・解説のあり方を提案！
- ・ 博物館などとの対話による改善へゴー！

→ 県内10施設の博物館の報告書のHP公開

ミュージアム・インクルージョン・プロジェクトからの展開



↑ サポート
兵庫県教委・神戸大学

博物館を会場として、持続的な関係を築き、すべての人の学びの機会を増やそうとするモデル開発の取り組み。

2024年度～

懇話会で、それぞれの課題をおしゃべりした結果

自由時間を持て余して行き場のない知的障害者が気軽に遊びに来られる仕掛けを考えているうちに、受付で「こんにちは」とあいさつしてパンフレットを渡すボランティアを知的障害者にしてもらうことになりました。



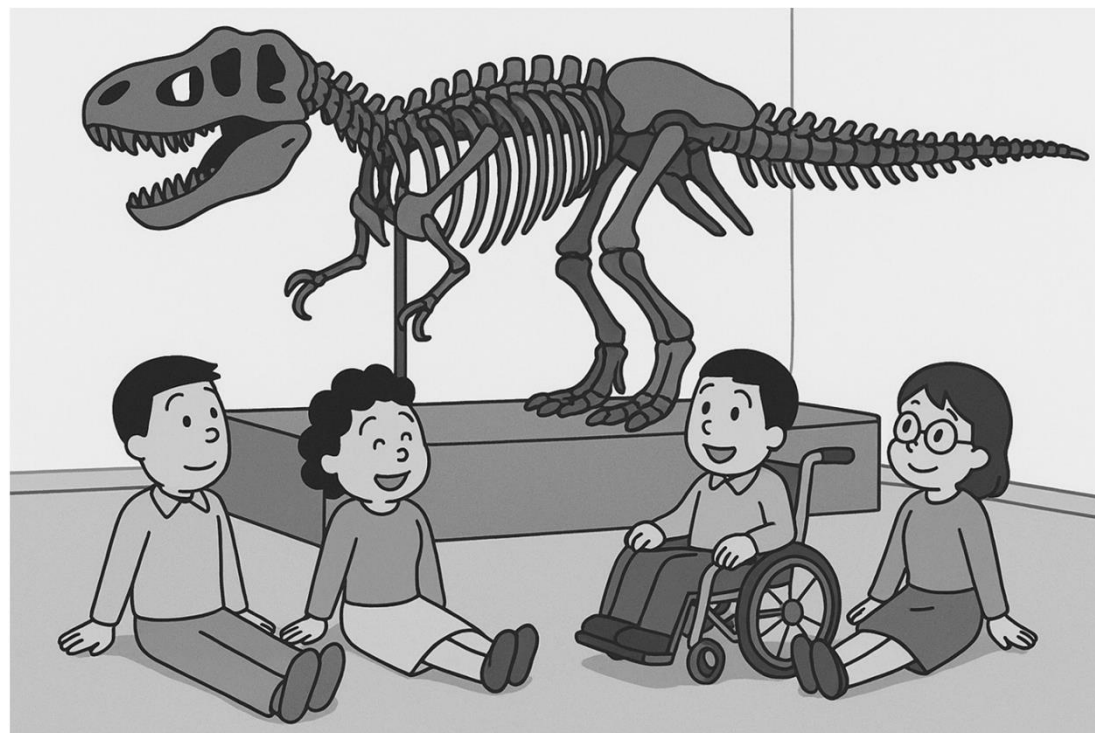
懇話会で、それぞれの課題をおしゃべりした結果

視覚障害者のグループが博物館ツアーを企画することになって、博物館側が視覚障害者向けの資料開発に乗り出しました。



懇話会で、それぞれの課題をおしゃべりした結果

「恐竜の骨の下でピラティスをやりたい」という突飛な希望から、障害者向け「博物館でピラティス」プログラムが実現の運びとなりました。



情報の収集・発信からみえてくること

- 兵庫県のコンソーシアムでは、障害者の学び場を検索することができるアプリを運営しています。
- 「学びたいけど、どこにどんな学びの場があるかわからない」という障害者向けのアプリです。
- アプリによって、いろいろな可能性が広がりした。
- このアプリを使って、特別支援学校高等部の授業を実施してもらっています。
- アプリで情報をみた県民が、障害者の生涯学習に関心をもって、支援者になりたいという希望をもつ人がいることもわかりました。



情報収集・発信

県内の実践に関する情報を収集しデータベースをつくり、アプリで配信。

<https://hyogo-learninglist.glide.page>



兵庫県内で140件の実践情報を集め、活動内容や活動場所などを検索できます。（スマホもPCもOK）

障害者の学ぶ場づくり実践の多くは、
事業担当者と障害者やその家族との
出会いから生まれています

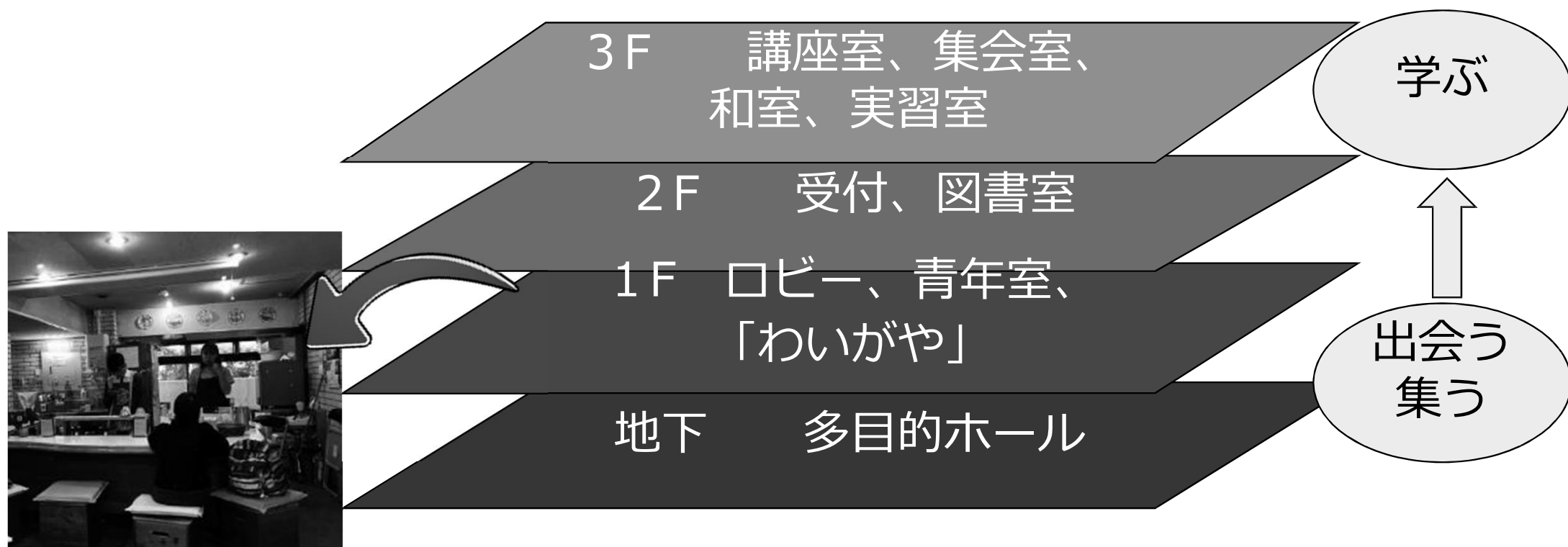


出会いを大切にすっぺ

※つだっちは仙台育ちです

障害者が働くカフェのある公民館

国立市公民館障害者事業（「わいがや」「青年室」「青年教室」）



「わいがや」は、まちの青年たちが運営する
カフェです。障害のある人も一緒に、コー
ヒーを淹れたり、接客をしたりしています。

「わいがや」は、公民館にやってくる
多様な人たちが「出会い」、コミュニ
ケーションを通して「気づき」を生み
出していくための「しかけ」です。



どんなふうに「わいがや」が生まれたかというと……

「わいがや」をつくった平林正夫さんのストーリー

(1980年くらいの話です)

社会教育主事として公民館に配属。
青年教育の担当に。



ところが



そこで



青年たちの生態を調べにまち歩き。



すると



重度障害のある及川
くんと出会いました

ということで



青年といっても、い
ろいろな背景のある
青年がいるのだな。

及川くんを中心
に、青年たちが
出会うコーヒー
ハウスの取り組
みを開始。

イラストはすべてAIに命令して描いてもらいました。



今日のまとめ

出会いは宝もの



- 力になってくれるキーパーソンを探しましょう。
- ちょっとした工夫で、共に学ぶ環境をつくることができないか考えてみましょう。
- みんなにとって楽しく有意義な学びの場を構想してみましょう。
- 学習機会の情報に意識を向けてみましょう。